

髄外性形質細胞腫を経験したので概要を報告した。患者は73歳男性。上顎歯肉腫脹を主訴に紹介医受診。抗菌薬の処方を受けるも症状改善せず、2004年7月当科紹介来院した。初診時、右側上顎前歯部から臼歯部の頬側歯肉粘膜に表面不正、暗赤色、弾性軟、無痛性で易出血性の境界比較的明瞭な腫瘤を認めた。画像所見にて右側鼻翼部から歯槽ならびに口角部にかけて直径約20mmの腫瘤様病変と右側上顎前歯部から小臼歯部にかけて顎骨に骨吸収像を認めた。生検時の病理組織学的診断にて形質細胞腫の診断を得、県立がんセンター新潟病院内科に転科し、髄外性形質細胞腫の診断のもと、VAD療法を2クール施行後、限局化した残存腫瘍を切除した。摘出物に腫瘍の残存は認めず、現在も腫瘍再発や多発性骨髄腫への移行は認めていない。

4 頭頸部腺様嚢胞癌の転移様相

新垣 晋・中里 隆之・小田 陽平
小林 正治・鈴木 一郎・斎藤 力
永田 昌毅*・星名 秀行*・高木 律男*
林 孝文**

新潟大学大学院医歯学総合研究
科・組織再建口腔外科学分野
同 顎顔面口腔外科学分野*
同 顎顔面放射線学分野**

腺様嚢胞癌は神経や血管浸潤を特徴とした、局所再発や遠隔転移の多い唾液腺悪性腫瘍である。腺様嚢胞癌の遠隔転移の様相とその関連因子について検討した。

頭頸部腺様嚢胞癌29症例を対象として、遠隔転移に関連すると考えられる要因(部位、大きさ、組織亜型、切除断端の腫瘍の有無)についてその意義を検討した。また、転移様相と転移出現までの期間、生存期間との関連性も検討した。

遠隔転移は21例に認められ、肺が最も多く19例、肝4例、骨4例などであった。遠隔転移に関連する因子は切除断端の腫瘍の有無のみであった。転移出現までの期間は平均52か月、転移出現後の生存期間は平均30か月であった。肺転移単

独と肺および他臓器転移とを転移出現までの期間、生存期間で比較すると67か月と47か月、24か月と19か月で肺単独が有意に長かった。全症例の10年および15年生存率は38%、23%であり長期予後は依然として不良であった。

5 アヘンアルカロイドによる皮疹がフェンタニルパッチで改善した1症例

八木 元広・宇野 勝次・香山 誠司*
水原郷病院薬剤科
同 外科*

症例は64歳男性で、胃痛にて胃全摘後、肝転移があり疼痛緩和のためオキシコドン錠を開始。翌日、皮疹が発現しフェンタニルパッチに切り替え、その後、疼痛管理上の問題もなく皮疹も軽快した。その皮疹に対し当薬剤科に薬剤アレルギーの検出同定試験が依頼された。しかし、被疑薬剤が麻薬で試験不可であり文献調査で対応した。文献上、モルヒネの持つヒスタミン遊離作用による皮疹発現が有力で、オピオイドのヒスタミン遊離作用を比べたデータではモルヒネが用量依存的に遊離作用を示し、フェンタニル、オキシモルフォン(オキシコドンの鎮痛活性物質)はなかった。しかし、モルヒネとオキシコドンは構造式が類似するため、さらに文献検索したところ動物実験でオキシコドンがモルヒネ以上にヒスタミン遊離作用を示すことがわかった。以上より、モルヒネ製剤、オキシコドン製剤で痒み・皮疹を発現した場合、フェンタニル製剤への変更が有効である。

6 がん専門診療施設におけるオピオイド鎮痛薬および鎮痛補助薬の使用動向

丸山 洋一
県立がんセンター新潟病院麻酔科

がん専門診療施設におけるがん疼痛治療の現状とその問題点を探る目的で、全がん協加盟施設を対象として「オピオイド使用量調査」および「鎮痛補助薬の使用に関するアンケート調査」を実施した。